

# 研

究テーマは自分で決めるものと、長い間思っていた。修士論文は、先生のご指導を得ずに自分でテーマを選んだが、結果は思わしくなかった。分散人工知能の研究では、コンセプト指向の欧米に対し技術指向の分散探索に挑戦したが、受け入れられるまで10年を要した。京大に移って、デジタルシティプロジェクトに取り組んだ。欧州がサイバシティだったので、京都では街と密に結合したサイバーフィジカルな都市を目指した。人のやっていないことをやる、自分たちにしかできないことをやる、それが研究だと思っていた。

しかし、9.11をTVで見たときに考えが変わった。海外研修で1年を過ごした思い出の都市だ。日本人の設計が誇らしかった高層ビルが崩壊する有様に衝撃を受けた。振り返って、自分の研究の進め方が正しいのか疑問を感じ始めた。研究にオリジナリティや先進性は大切だが、それ以上にやるべき研究があるのではないか。9.11の後の欧米の民意は分断されていた。米国民はイラク戦争を支持したが、フランス国民は反対した。価値観を共有する欧米でさえ、国境を越えれば意見が大きく異なる。まして、隣国の言語を理解できないアジアでの合意形成は難しい。

言語障壁を下げるのに寄与できないかと思った。急遽アジアを回り、機械翻訳を使った異文化コラボレーションプロジェクトを立ち上げた。日中韓馬の学生30余名が共同でソフトウェアを開発する初めての実験だ。ファンドもないプロジェクトに、中韓馬の大学が協力してくれたのは、競争が今ほど熾烈でなかったためだろう。その後、多言語環境を作るための基盤ソフト（言語グリッド）の開発を始めた。ただ、自分には言語処理の経験はない。勘も力もないところで研究を始めることになった。

異文化コラボレーションの研究は、国際活動の中で学生は育つが論文が書きにくい。博士学生を研究に

誘うために、フィールドから始まる情報学を考えたいと思った。学生が課題指向の研究に打ち込むには、問題を発見し定義する過程が論文になる必要がある。そうでなければ、課題指向の掛け声は、要素研究のカバーストーリーに変容してしまう。そこで、異分野の教員が集まるフィールド情報学研究会を始めた。メンバであった片井修先生から、フィールドは「分析的・工学的アプローチの困難で、統制できず、多様なものが共存並立し、予測できない偶発的な出来事が生起し、常に関与することが求められる場」という定義をいただいた。常に関与が求められるという言葉が胸に響いた。



[シニアコラム]

## IT好き放題



[No.80]

## 9.11と3.11

3.11は、研究室の送別パーティの日だった。そこに、津波の映像が入った。仙台は高校までを過ごしたところで知人も多い。他人事ではなかった。学会会議などで復興の議論が始まるにつれ、問題の複雑さに戸惑うようになった。意見を求められれば専門の立場でコメントすることはできる。しかし、放射能、児童心理、防災など、ほかの分野の専門家と協力してグランドデザインを描くのは難しい。自分がそうした訓練を受けてこなかったことに気づかされた。

さまざまな専門家が集まるサマーデザインスクールをやってみようと思った。予算もなかったが、共感してくださった方々と、15テーマのワークショップを3日間実施した。その中には、震災にかかわるテーマもいくつかあった。2年後に、リーディング大学院のデザインスクールを立ち上げた。分野横断的な教育が目的だが、課題指向というモチベーションは9.11を引き継いでいる。進むべき方向性に確信が生じ始めた。問題解決に情報技術を使うのではなく、問題を発見し定義するプロセスに最先端の情報技術を投入したい。それができれば、情報学の研究者もフィールドに向き合えるようになると思う。

(2017年6月16日受付)

石田 亨

Toru ISHIDA

京都大学大学院情報学研究科

[正会員] ishida@i.kyoto-u.ac.jp

マルチエージェントシステム研究に貢献し、AAMASの第1回委員長を務めた。京都大学で社会情報学専攻やデザインスクールなど、分野横断型の教育プログラムの発足に参画。デジタルシティ、異文化コラボレーションなど情報技術と社会をつなぐ研究を推進。